

がん看護領域における 特定看護師(仮称)育成のための カリキュラム

大阪府立大学大学院看護学研究科	教授	田中京子
	科長	高見沢恵美子
大阪市立大学医学部附属病院	教授	工藤新三

がん看護の特定看護師(仮称)を 養成することに至った経緯

大阪府立大学

平成10年 大学院修士課程開設

平成12年 大学院博士前期課程がん看護専門看護師(CNS)コース開設

〈看護学研究科 教育理念〉

生命と人権の尊重を基盤とし、保健・医療・福祉および社会の諸変化に対して
クオリティ・オブ・ライフ(QOL)を志向した創造的・実践的な対応ができる専門的
知識と技術をもった人材を育成し、看護学の発展と人々の健康に寄与する。

社会における変化

平成19年 がん対策基本法 施行

:がん予防及び早期発見の推進

がん医療の均てん化の促進等→専門的な知識及び技能を有する
研究の推進等 医師その他の医療従事者の育成

がん看護の特定看護師(仮称)を 養成することに至った経緯

平成19年度－平成23年度：**がんプロフェッショナル養成プラン**（文部科学省事業）

「6大学連携オンコロジーチーム養成プラン」が採択

高度化したがん医療の推進は、医師のみにより可能なものではなく、高度ながん医療に習熟した看護師、薬剤師、その他の医療技術者（コメディカル）、医師以外の各種専門家が参画し、チームとして機能することが重要。



看護師が自律的に判断できる能力の向上

- ・ 一定の医学教育・実務経験を前提にして、専門的な臨床実践能力を有する特定看護師（仮称）が、医師の「包括的指示」のもとで医行為を実施することを通して患者のQOLの維持・向上を目指す。
- ・ 医師の「包括的指示」を活用し、看護師が早期に的確なケアを提供できるためには、がん医療・看護についての高度な知識が必要。

がん看護領域の特定看護師(仮称)としての 活動の領域



がん予防、診断期、治療期、長期生存期、再発期、終末期

複雑で解決困難な看護問題をもつ
個人、家族、集団



水準の高い看護ケアを効率よく提供する



がん看護学分野の知識・技術を高め
多職種協働のチーム医療を推進しながら
保健医療福祉の発展に貢献できる看護師

養成課程のねらい

- ・高度な知識・技術を用いた**教育・指導**を行う
- ・がん治療に伴って生じる問題に予防的に介入する

看護師



- ・自立・自律して
質の高い療養生活を送る

患者



家族

- ・全人的(身体的・心理的・社会的・霊的)苦痛
に対して、がん病態や薬理に関する知識や
アセスメント技術を用いて**多角的にアセスメ
ント**を行い、医師の包括的指示のもとに効果
的な方略を判断、実施、評価する

- ・身体的・心理的・社会的・
霊的苦痛の緩和
- ・権利の擁護
- ・生活の質の向上

- ・必要なケアが円滑に行われるために、保健
医療福祉に携わる人々との**調整**を行う
- ・個人、家族および集団の権利を守るために、
看護職を含むケア提供者に対し、**相談**を行う
- ・倫理的な問題や葛藤の**解決**を図る
- ・実践の場における**研究**を行う

医療



スタッフ

- ・円滑なチーム医療
- ・看護・医療の質の向上
- ・専門知識・技術の向上

修得を目指す医行為

・化学療法の有害事象管理と処置：

化学療法についての知識・技術に基づいて、
抗がん剤投与中の血管外漏出のモニタリングと
漏出時の投与中止の判断、ステロイド投与

悪心・嘔吐、口内炎など想定される有害事象に対して、
発症を予防すると共に、医師の事前指示をもとに
薬剤使用を判断し、実施・評価する。

【主な授業科目】

共通特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

がん看護学演習ⅡB

がん看護学実習

がん看護学援助特論

職種横断的ケーススタディ演習

修得を目指す医行為

・放射線治療の有害事象管理と処置：

放射線療法についての知識・技術に基づいて、皮膚・口内炎アセスメントと皮膚・口腔内保護剤の選択と決定など、放射線治療中の患者に想定される有害事象についてのアセスメントとそれに対する対応処置を行う。

【主な授業科目】

共通特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

がん看護学演習ⅡB

がん看護学実習

がん看護学援助特論

職種横断的ケーススタディ演習

修得を目指す医行為

- 化学療法の有害事象管理と処置
 - 放射線治療の有害事象管理と処置
- 

- 有害作用の発症頻度の低減
有害事象による苦痛の程度・持続時間が減少することで、患者のQOLの維持・向上が図れる
- 治療の完遂率が高まる→奏功率や生存期間への寄与

修得を目指す医行為

・症状アセスメントおよび緩和治療薬の選択と投与：

症状に関する知識に基づいて、医師の包括的指示のもとに患者の症状に応じて適切に薬剤（オピオイド、非オピオイド、鎮痛補助薬、緩下剤等）を使用する。

状況に応じて薬剤変更（オピオイドローテーション等）の必要性を判断する。

症状アセスメントの結果に基づいて、レスキュードーズ等の適正使用を実施・評価する。

【主な授業科目】

共通特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

がん看護学援助特論

職種横断的ケーススタディ演習

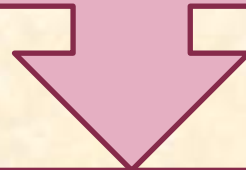
生体情報論

がん看護学演習ⅠB

がん看護学実習

修得を目指す医行為

- 症状アセスメントおよび
緩和治療薬の選択と投与



- 早期の苦痛緩和→痛みの持続による二次的
問題（不眠、抑鬱、意欲低下、ADL低下、等）
の発症予防および改善
- 苦痛の程度・持続時間が減少することで、患者の
心身の安寧が得られ、満足度が高まる
- 治療や日常生活における患者の意欲が高まる
- 医療者の精神的負担の軽減

修得を目指す医行為

その他の介入

- ・行動療法: 治療に対する過度の緊張や不安に対して、リラクセーションを実施する。
- ・精神療法等: 終末期患者・家族やボディイメージを損なう手術を受けた患者などの悲嘆に対して、サイコオンコロジーに基づく精神療法等の選択・実施を行う。

【主な授業科目】

共通特論 I・II・III

がん看護学援助特論

職種横断的ケーススタディ演習

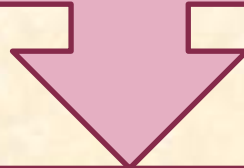
がん看護学特論

がん看護学演習 I B

がん看護学実習

修得を目指す医行為

- その他の介入：
認知・行動療法や精神療法



- 心身の苦痛緩和による精神的安寧、ストレス緩和
- 患者・家族の病的悲嘆予防
- 患者・家族の対処促進
- 医療者との信頼関係が強化

がん看護領域の特定看護師(仮称)に 求められる能力

他専門職と同等の
知的能力
知識を獲得する能力

情報収集能力

アセスメント能力
問題の分析力

卓越したケア
実践能力

倫理的問題に
気づく能力

倫理的問題を
調整・解決する能力

保健医療福祉の
人々との調整

独自の役割を獲得・
実行する能力
交渉力

企画する能力

変革する能力

コミュニケーション能力
対等な立場で
議論する能力

教育内容

●課程修了の最低必要単位数/時間数

: 36単位/750時間

●フィジカルアセスメント・臨床薬理学・病態生理学の主たる科目

科目名	単位数	時間数
共通特論Ⅰ	2	30
共通特論Ⅱ	2	30
共通特論Ⅲ	2	30
生体情報論	2	30

●演習・実習以外のその他の科目

科目名	単位数	時間数
理論看護学	2	30
看護学研究法	2	30
看護倫理学	2	30
家族看護学	2	30
看護管理学特論 I	2	30
がん看護学特論	2	30
がん看護学援助特論	2	30

● 演習科目

科目名	単位数	時間数
がん看護学演習 I B	2	60
がん看護各演習 II B	2	60
職種横断的ケーススタディ演習	1	15
SPを用いた 職種横断的臨床課題演習	1	15

● 実習科目

科目名	単位数	時間数
がん看護学実習	6	270

課程2年間のスケジュール

* は集中講義

学期	前期						後期					
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
博士前期課程1年次	共通特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ											
	生体情報論											
	理論看護学											
	看護学研究法											
	看護倫理学											
	家族看護学											
	看護管理学特論Ⅰ											
	がん看護学特論											
				がん看護学援助特論								
			がん看護学演習ⅠB			がん看護学演習ⅡB						
									がん看護学 課題研究			
博士前期課程2年次				がん看護学実習								
				* 職種横断的ケーススタディ演習 * SPを用いた職種横断的臨床課題演習								
	がん看護学 課題研究						がん看護学課題研究					

17

共通特論 I (腫瘍病態生理学)

臨床薬理学
病態生理学

担当者 15名(医師、薬剤師など)

授業目標

1. 悪性腫瘍の生物学、分子生物学的特徴について体系的に理解する。
2. 抗がん剤の種類とその作用機序、耐性機序について学習する。
3. がん薬物動態、薬力学についての基本的概念と副作用、治療法との関連について学習する。
4. 放射線生物物理学について基本概念を学習する。

授業内容

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1) 発がん遺伝子異常 | 9) 放射線生物学の基礎 |
| 2) がん細胞の特徴 | 10) 放射線物理学の基礎 |
| 3) がん細胞の特徴 | 11) 腫瘍病理学の基礎 |
| 4) がん細胞の特徴 | 12) がんの遺伝子診断と治療 |
| 5) 腫瘍免疫、サイトカイン | 13) がんの疫学と予防 |
| 6) 薬物療法の種類とその作用メカニズム | 14) 生物統計学の基礎 |
| 7) 薬物療法の種類とその作用メカニズム | 15) がん化学療法の原理 |
| 8) 薬物動態の基礎 | |

共通特論Ⅱ（臨床腫瘍学総論）

臨床薬理学
フィジカルアセスメント

担当者 14名（医師、看護学部教員など）

授業目標

1. 悪性腫瘍の診断、治療、特に**がんの診断学**の基本的知識、**がん薬物療法**の基本原則、抗がん剤の種類とその作用機序、薬理動態、毒性とその対策について学習する。
2. **がんの外科治療、放射線治療**の基本的知識を確認する。
3. **がん患者とのコミュニケーション、病名告知、インフォームドコンセント**のとり方、**緩和医療**の進め方、**がん看護**のあり方などを学習する。

授業内容

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1) 腫瘍の画像診断学 | 9) 固形がんの集学的治療 |
| 2) がん臨床試験の種類とデザイン | 10) がん診療におけるチーム医療 |
| 3) 腫瘍外科総論 | 11) がん診療における臨床倫理 |
| 4) 放射線腫瘍学総論 | 12) がん臨床における危機理論 |
| 5) 抗がん剤の種類と毒性 | 13) がん緩和医療 |
| 6) がん分子標的薬 | 14) がん緩和医療 |
| 7) がんの免疫・ワクチン治療 | 15) がん診療におけるIVR |
| 8) 抗悪性腫瘍薬の臨床薬理 | |

共通特論Ⅲ（臨床腫瘍学各論）

病態生理学
フィジカルアセスメント

担当者 14名（医師）

授業目標

1. 造血器腫瘍、消化器がん、肝・胆・膵がん、乳がん、婦人科がん、泌尿器がん、頭頸部腫瘍、小児がん、また、肉腫、骨、軟部腫瘍など、**各種臓器がんの標準的治療**を理解し応用できる知識を身につける。
2. **原発不明がん**の定義と分類を理解し、治療方針を修得する。

授業内容

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1) 小細胞肺がん | 9) 悪性リンパ腫の分類と治療 |
| 2) 非小細胞肺がん | 10) 乳がん |
| 3) 頭頸部腫瘍 | 11) 乳がん |
| 4) 食道がん | 12) 婦人科腫瘍 |
| 5) 胃がん | 13) 泌尿器腫瘍 |
| 6) 大腸がん | 14) 小児腫瘍 |
| 7) 肝・胆・膵の悪性腫瘍 | 15) 原発不明がん・骨・軟部腫瘍 |
| 8) 白血病の治療 | |

生体情報論

臨床薬理学
病態生理学

担当者 1名(看護学部教員)

授業目標

生体情報を理解し生命活動を論理的・科学的に理解する能力を養い、**フィジカルアセスメントに応用**することを目的とする。講義は日常生活で最も脅威で、多くの人々が経験する**疼痛**を学習する。疼痛の情報伝達機構、フィジカルアセスメント、疼痛コントロールと緩和を学習し、疼痛緩和を考える。

授業内容

- 1) 生命の活動
- 2) 遺伝・染色体・形質転換
- 3) 細胞分裂とがん化
- 4) 細胞の情報伝達
- 5) 神経系の構造と機能
- 6) 神経系の構造と機能
- 7) 疼痛
- 8) 痛みの情報伝達
- 9) 痛みの情報伝達
- 10) がん性疼痛と薬物
- 11) 疼痛と薬物
- 12) 疼痛緩和
- 13) 疼痛緩和
- 14) 緊張の緩和指標
- 15) 生体情報の客観的

看護学特論

担当者 1名(看護学部教員)

授業目標

1. がん患者と家族への看護に用いられる看護介入モデルについて探求する。
2. がん患者と家族への看護に主として用いられる概念・理論について探求すると共に、実践および研究への適用について検討する。

授業内容

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1) 看護モデルについて | 7) ターミナルケアにおける最近のトピックス |
| 2) 看護モデルの分析と評価 | |
| 3) がん看護介入モデルの開発 | |
| 4) がん看護介入モデルの分析1 | |
| 5) がん看護介入モデルの分析2 | |
| 6) がん看護に用いられる概念・理論の理解と分析・評価 | |
| (1) Stress & Coping, Adaptation 1 | (6) Grief 2 - Mourning |
| (2) Stress & Coping, Adaptation 2 | (7) Body Image (Self Concept) |
| (3) Loss & Crisis 1 | (8) Social Support |
| (4) Loss & Crisis 2 | (9) Total Pain |
| (5) Grief 1 | |

看護学援助特論

担当者 3名(看護学部教員、がん看護CNS)

授業目標

1. がんの様々な治療および状況に伴う**患者・家族への看護援助技術**について、基礎となる**理論、方法論、評価方法等**について探求する。
2. 1で学んだ内容およびがん看護学特論で学んだ理論と文献とを活用して、特定のがん患者・家族に対する看護援助について検討する。

授業内容

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1)がん患者・家族のアセスメント1 | 10)放射線療法に伴う看護援助1 |
| 2)がん患者・家族のアセスメント2 | 11)放射線療法に伴う看護援助2 |
| 3)がん治療に伴う倫理的問題 | 12)がんの代替・相補療法と看護 |
| 4)がんの予防・早期発見 | 13)患者教育 |
| 5)手術に伴う看護援助1 喉頭全摘出術 | 14)がん患者の対処プログラム |
| 6)手術に伴う看護援助2子宮摘出術 | 15)ターミナルケア- 家族への看護援助 |
| 7)手術に伴う看護援助3尿路変向術 | |
| 8)化学療法に伴う看護援助1 | |
| 9)化学療法に伴う看護援助2 | |

看護学演習 I B

担当者 5名(看護学部教員、医師、がん看護CNS)

授業目標

1. がん看護学特論で学んだ概念・理論を基盤として、**終末期がん患者**に生ずる疼痛をはじめとする**様々な苦痛症状**ならびに**心理・社会・霊的苦痛・苦悩を緩和する方法**を検討する。
2. 終末期患者・家族の状態・状況に対応した**質の高いケア**を提供する。

授業内容

- 1)～ 2)がん看護専門看護師(CNS)とターミナルケア
- 3) パリアティブケアの概念とその歴史
- 4) パリアティブケアの実際
- 5)～ 7)終末期がん患者が抱える様々な苦痛・苦悩とその看護
- 8)～ 9)がん看護コンサルテーションの実際(痛みを持つ患者等)
- 10)～11)終末期がん患者のSpiritual Painと看護
- 12)～24)終末期がん患者・家族が抱える苦痛・苦悩への援助
- 25)～26)終末期がん患者の身体的援助の分析と評価
- 27)～28)終末期がん患者の心理・社会・霊的問題への援助の分析・評価
- 29)～30)終末期がん患者に関するコンサルテーションの分析・評価

看護学演習ⅡB

担当者 6名(看護学部教員、医師、がん看護CNS)

授業目標

1. 特定のがん治療を受ける患者に生じる苦痛を伴う症状や副作用の予防・
早期発見・早期対処ならびに、がん治療に伴う患者・家族の苦悩を緩和する
方法を検討する。
2. がん患者・家族が質の高い療養生活を送ることができるようなケアを探求する。

授業内容

- 1)～2)がんの予防と早期発見
- 3)～4)最新のがんの診断と治療
- 5)～6)化学療法看護
- 7)～13)化学療法患者・家族の援助
- 14)～15)化学療法患者の副作用に対する援助の分析・評価
- 16)～17)化学療法患者・家族が抱える心理・社会的問題への援助の分析・評価
- 18)～19)造血幹細胞移植の看護
- 20)～24)造血幹細胞移植患者・家族の援助
- 25)～26)造血幹細胞移植患者の身体的援助の分析・評価
- 27)～28)造血幹細胞移植患者・家族の心理・社会的問題への援助の分析・評価
- 29)～30)骨髄移植看護の役割の展望

模擬患者(SP)を用いた職種横断的臨床課題演習

担当者 13名(医師、がん看護CNS、がん専門薬剤師、家族支援CNS、看護学部教員、薬学部教員)

授業目標

1. がん診療における**チーム医療の必要性**を理解する。
2. オンコロジーチームにおける**腫瘍内科医の役割と機能**を理解する。
がん看護専門看護師の役割と機能を理解する。
がん専門薬剤師の役割と機能を理解する。
3. **オンコロジーチームの理想像**を展望する。

授業内容

多職種の学生及びSPと共に、他職種の立場に立ってがん患者とのコミュニケーションに関するシナリオを作成する

ロールプレイを行う

がん診療に携わる他職種の役割と機能を理解する

がん診療におけるチーム医療のあるべき姿を学習する

関わりの場面：

- ・再発告知
- ・薬物の副作用への対応
- ・積極的治療から緩和医療への移行
- ・抗がん剤を変えるときへの対応
- ・代替療法を望む家族との対応、等

職種横断的ケーススタディ演習

担当者 13名(医師、がん看護CNS、がん専門薬剤師、家族支援CNS、看護学部教員、薬学部教員)

授業目標

1. 多職種医療スタッフに理解できるような**症例提示**ができる。
2. 職種横断的症例検討における**腫瘍内科医、がん看護CNS、がん専門薬剤師の役割と責任**を理解する。
3. 職種横断的症例検討会の**有用性**を理解する。
4. **機能的な職種横断的症例検討会を実現する**ための構成要素を抽出する。

授業内容

実際のがん患者が抱える問題点を異なる職種の立場から症例発表を行う

多職種の学生間で問題点の整理と解決方法を検討する

オンコロジーチームで必要とされている職種横断的症例検討のあり方を習得する

職種横断的チーム医療のあるべき姿を模索、検討する

指導体制

実習施設・病棟

- ・医学部教授
- ・医師
- ・薬剤師

医行為実施の判断・
実施について支援

- ・がん看護専門
看護師

患者・家族の臨床的
なアセスメントとケア
実践の指導

実習生

大学

- ・教員
- 事例分析・カン
ファレンスでの
学生指導、施
設などとの連絡
調整

修得する医行為とカリキュラムとの関連

症状アセスメントおよび緩和治療薬の選択と投与

講義

症状アセスメントに必要な知識・技術

- 1) がんの病態生理、治療
- 2) 症状の発生機序、増強/緩和因子、
- 3) アセスメント方法、技術

緩和治療薬の知識

症状緩和治療薬の薬理作用、薬物動態、投与方法禁忌、副作用

演習

症状アセスメント技術の向上

シミュレータを用いた
フィジカルアセスメント

症状アセスメントの実施

苦痛症状のアセスメント

- ① 痛み
- ② 悪心・嘔吐
- ③ 便秘・下痢 など

緩和治療薬の選択と投与の実施

- 1) 適切な薬剤を根拠を基に選択
- 2) 薬剤を安全・確実に投与

実習

実践実習

患者の苦痛症状について適確にアセスメントを行い、患者にとってより効果的な緩和治療薬を選択し、投与する

修得する医行為とカリキュラムとの関連

化学療法有害事象管理と処置

講義

化学療法に関する基礎知識

- 1) がんの分子生物学的特徴、腫瘍免疫
- 2) 化学療法の種類と作用メカニズム、薬物動態
- 3) 化学療法による有害事象

有害事象管理と処置の知識と技術

- 1) アセスメント
- 2) 予防・対処方法

演習

有害事象のアセスメントの実施

- 1) 患者に施行されるレジメン、患者背景からの予測
- 2) 実際に起こっている有害事象の程度の把握

有害事象の予防・対処方法の実施

- 1) 予防的な患者教育
- 2) 苦痛緩和策の考案・実施

実習

実践実習

化学療法を受ける患者の有害事象に関するアセスメントを実施し、有害事象の予防および苦痛緩和のための方策を考案し、実施する

実施評価の安全基準

1. 患者の抱える症状の原因・発生機序を説明することができる
2. 患者の抱える症状について説明することができる
3. 医行為：包括的に指示されている薬剤の中から、適切な薬剤を選択することができる
4. 医行為を行った場合の期待できる結果（ベネフィット）およびデメリットを説明することができる
5. 安全な医行為を実施することができる
6. 実施した医行為に関する評価を行うことができる

教育方法の工夫

- 医学および薬学の大学院生とともに講義・演習を受ける機会を設け、将来チームとして活動する基盤づくりをしている。
- 講義を行う医師、薬剤師などとともに、がん看護専門看護師が指導者として存在する施設での実習を行い、困難事例に対して専門的な指導を受けられる体制をつくっている。
- 演習・実習後の事例検討を通して、より正確なアセスメントと効果的なケアの実践について、振り返りを行っている。
- フィジカルアセスメントのシミュレーターを用い、学生が技術を磨けるようにしている。
- 知識の習得のため、本学図書センターにおいてがん医療及び看護に関する図書の充実をはかっている。

実習評価

以下の到達目標の下位項目について、**A・B・C・NAの評価基準**で評価を行う

1. がん患者の身体的・心理的・社会的・霊的苦痛について、高度な知識に基づいた専門的な看護判断ができる。
2. がん患者のもつ全人的な苦痛を予防・緩和するために、熟練した技術を用いて高度な判断に基づく看護実践を提供することができる。
3. がん患者および家族に対する倫理的感性を高め、倫理的な態度で接することができる。
4. がん患者および家族に関して、看護職者を含むケア提供者に対して、がん看護専門看護師と共に、相談、調整、教育などの専門看護師としての役割を実践することができる。
5. がん患者に関連して生じた倫理的問題に対して、倫理的調整を行うことができる。
6. 医療チームの中で、他職種との連携・調整をがん看護専門看護師と共に図り、ケアをコーディネートすることができる。